



利
門
號
卷
1/71
1-2

吉日算芳律編

明治二年四月廿四日
藤野 洩 氏序

俳
民選業選生浪發書集三編 軒坤 冊二

東京香同社藏梓

引
驥志先了くゆる馬尔
かくとゆうやくあらう程
等弓の先わらまくらひかき等
かの一把石く力もわくこじま
そくすり紛り跡もあつま
きをひりとくらもあくめどり

様の食事の野の筋スジ
ほんと彈ハグるす筋スジ、何を
か我ガの社マツおみ歎カクらむ打ハシて
けケくクく都ミチに四シキの横ヨコす
幸ラッキせあうと風フウの宿ヤシタに
枕カイを置シテけケー 又雪ユキの

月ヅあるの今イマ入アリそも
捕ハシるよ
かくカクく序シキ内ナカニと清シキよ
半ハーフの夜ナイト人ヒト袖スリーブから裡リ
立タチる者ヒトはれ
固ソリいとハシキと解ハグくはれ

はまくり詠何へ只、一筋の妙絶
すまくいじりてゐるなり。吟味
していひゆるが、あるまことに、
一考をしたる

おもこのあたり。 さすが
草軒先生もあらう。



附 言

。本集編纂の趣意、庚寅年の冬發行せし初編にて、文幸卯
年冬出版せし二編にも載せられ、紫今やく之徳を以
。此二編は壬辰年の冬別冊にてぐん所ちりし處のに附れて之を
乞ひ代りて、頃日人々に付され補修はせられ共毎月の際りまで
漏れなく多くあらひて、宣傳が別を終へ

。本集ハ初編二編と別題を選み、と書か既に二編は存ひ得
四篇を編出せんとする故に、卷中かに載せる吟題の數を
暗証するに容易ならぬ様で、本篇より冊の初題自録を掲
あらう索引の便とす

明治十九年初冬時、序

槐軒主、性古法

目録

○上の巻 初空 一御降 二惠方 三着衣初
 初夏 五初曆 六書初 七屠蘇 八羔餵
 松の内 九春神祇 土初午 土餘亨 三弓巢
 海 厂 古春風 古善水 未雪解 七下萌
 獨活 丸草餵 丸雑 丸善水 未雪解 七下萌
 各所參 茜桃花 茜海棠 茜梅 甘藷
 蛙 雜春 世春名残 世春名残 甘藷
 蚊 事梅 世春名残 世春名残 甘藷
 事鶯歌 茜葵菊 茜鹿角 茜苔花 甘藷
 芫蝙蝠 茜蘋花 茜梅木 茜梅 甘藷
 田地樓 茜蘋花 茜梅木 茜梅 甘藷
 冠水室 茜蘋花 茜梅木 茜梅 甘藷
 置蟬 茜蘋花 茜梅木 茜梅 甘藷

三 畏世共三里黑

辛

○下の巻 四
 御祓 五連句 守山二巻 自五一至五四
 秋蟬 一初涼 一霧 二秋の聲
 烧米 五秋の蚊 五秋茄子 六玉蘭金
 蟬螂 六相撲 六冬月 七松待
 多観 七秋鈴 七秋茄子 八玉蘭金
 至底毛 八秋鈴 九高麗蘭 九高麗蘭
 亨菊 九秋茄子 十厚 一古萼
 芝雜卉 一古萼 一古萼 一古萼
 芝紙衣 一古萼 一古萼 一古萼
 芝家晴 一古萼 一古萼 一古萼
 芝神樂 一古萼 一古萼 一古萼
 芝名所言 一古萼 一古萼 一古萼
 芝冰柱 一古萼 一古萼 一古萼

朕

荒敗

卑巨憲

卑埋火

四木兔

三

鴛鴦

四綱代守

昌鎭

昌重憲

罷師走

異

年木旗

巴鐵乞

只多述懷

只年の尾

罷

追加

連句玄仙二卷

自平至平三

以上

新選年浪發句集三編

藤井 漢氏遺愛之記

半日庵芳律選

蓬萊庵文禮校

一具庵尋香閱

初室

初室のむと渴持やかニの山 東京承
 ものをもけるや詔書の梢より、 之丈都
 ちうとうて鶴もす。 初室、 嵩浦
 初室や、 なむれ。 山を仰げば、 其
 まゝすすりきる窓の跡に、 青
 和室や、 日の出る方には日ひの前、 素
 水

上の巻

初室

神室や 佐までそれヽ事とさへ 羽後
そ度室や あゝ心の事一物、
鞠絆も 吉い事か 神よせら
念へて 神室をも、水まみれ
暫ヽ事か 神うへと川の室 河前
神室や 仰や眉の皺のりて 崇代有
そのまきよま山やねよを細は
神室や 人ひつまきちまくじ 陸中
神室や うね 鵬て 広野の海 信濃
神室や うね 鵬て 広野の海 信濃
眼す風く あナ神室の 鵬の風 越後
そら室をも、多や あらじ海の風 上毛
吳

神室や 白ひそゝの山うら
や地よき 風の吹くそゝの室
そら室の色子津印の入江うす
星劍の事そら室とくそく
神室や うねうね 幕うねうね
そら室や 草を踊り 鶴門下
神室や 草をあらの事ま
そら室や 水をめり 深うね
神室や 鶴門下 うねうね
星子晴れ萬葉の時を神室 相模
不二子のひといすへとくそく 周防
夢うねうね風を 一 神室

勅室布旅の黒鞆をニモ厚
脊を伸るやうに向むかひ室
臺ひ賜もさやうすりテ御室
勅室よとや周十里の如く

ほ 隊

船時よりほ隊らううとをまく
ほ隊事ちぬき隊はるくの程
おとく船時よりほ隊はるくの程
ほ隊の船もとくの時よりほ隊
ほ隊とそくうちの日の南よりほ
船もとくの船とくの船山ば
ほ隊和也の郷裡の脊をまくる

牛三

琴山月山三山少樹

上毛

磐

相模

筑紫近歸

筑紫

豊前

黙祥芳

史翠松

纏

ほ隊やうすりねれ——葉の羽鐵
船もとくのあくや拂——き多く氣
ほ隊やねむれ事——風雲響うく
ほ隊やうう船——ふ印の胎
下船う。——今ほ隊の室もまし
ほ隊や拂て拂うる事——牛の徳
和子引にぬひを機煥り雀うの
ほ隊や拂りゆれる船もまき
ほ隊や用ひき考考せぬれる
船もまきや密行のうす船もま

二三

信濃越後
磐城信
室貫芳船
山雲山白
泉山左風
素地磁隊
年嘯年參

内陣や外院を常々廻せ
和室の書類をめり胸を重す者
侍は降り候るが幸甚お詫び
は降り候るが幸甚お詫び
おまかで下さるが幸甚お詫び
おまかで下さるが幸甚お詫び
松井寺へゆくが幸甚お詫び
おまかで物語り候るが幸甚
おまかで物語り候るが幸甚
内陣の果てあらうと御内柱
内陣の果てあらうと御内柱

元方

杖曳きぬ多鶴考萬方の吉地山
此處よき下り場す
立方棚

伴勢
伴豫
文芳
禮緯

豊前
東京
其美
不言

萬方より説ひ仰りテせひ連
船手より持りて向ひ萬方より
傳ひ候すうちもかく事好え方より
又舟舟より舟とソヤ吉オ棚
放り候す之方からしや旅り室
佛の神一舟乗すえりしのれ
我吉方舟
舟方より舟と案例の茶水代
喰ひ候す戸や勤き舟と萬方棚
舟御すと舟と舟雅也吉方棚
向後事も舟と舟雅也吉方棚
支輕舟と舟の舟也萬方舟

嘉義代

芳友室儿蟲士蟲山海堂琴行我智
唯本山

宿のすえ方神山やうり船 羽後
湯車す 鶴鷺り葦原元方えれ
せうへ吉方すせんせんせん
まうらぬ終す東方り血ひ風
我旅もとあまた眼高せ方ば
幸せな旅と吉方まで
を方とて來ようと居り宿
門あら戸やらは東方の宿を先 上
薑柱や古方詣り帝り坐る
城もとひまくけに東方道 東京
白のうさ指すえ方れ
能い多き宿く東方居りえうじ

、 、 、 、 、 、 、 、
、 、 、 、 、 、 、 、
、 、 、 、 、 、 、 、

孝山 泉波川 潤自音 可古 梅祥松
芳 菲 虬元松靜川 芳古 梅祥松
緋

着衣始

まひのモ赤のちり金や着衣始
先覗め西間アリリリ多赤始
人柄ハ常よりあれとせんすめ
着衣始やアテ先階多赤始され
始めや家内始アテ着衣始 豊後
ソラ作羽後常陸豊前東黙博
仲間前アリキヤキシキアメ
御精力仲間前アリキヤキシキアメ
ホウアテキシキアメキシキアメ
着衣始也者也巨體を付申れ

、 、 、 、 、 、 、 、
、 、 、 、 、 、 、 、
、 、 、 、 、 、 、 、

唯眞風清柳蘭岸吳文曉園
風雨來格下雨柳水文曉園

月桂室宣芳水文綱芳仙海倫宣泉鳳象吳默吳宣泉鳳象吳美濃吳梅毒吳常陸鶴羽後本芳、一里祥崇、翁梅翠、山鳳宮松琴志友、東京伯、高橋、民考、

初夏
和氣り纏まく夕日二日元
暮の根きりやる子育や宝船
袖ゆゑや吉時の櫻、行方の自
らの事や酒、物色の美しい歌
袖ゆゑや朝子をうへて

初夏りぬ一や絹の小酒盛
もくすりや景すと多、酒食賜ります
袖暮りと御まつめ人り君ゆゑ
袖ゆゑや又、所多傳内袖く是人
とほゆゑり是人探すやまくらえ
袖ゆゑや袖色て、喉を笑ひく
もくすりや、富士の屏、仰ハ枕、元
初ゆゑや、御ひゆて、六、もくら、先
もくすりとくを、小也好不ニリ山
袖ゆゑや人をまかくあらむ
あらむかむき、袖景り第ひく、

羽後、常陸鶴、磐城、曉、、
東京伯、高橋、民考、

神事や也。昔をありりて修東京其
の事や語を書く力多ひ旅、涼芳
初至り嘲や歸り竹切者

初曆

神の灯塔あら燈籠也。初曆
演萩の音信すえんと初曆
媒人乍先見し。今初曆み
樂うめ飯を食うもくつま美
自らよ葉りをやせん。神曆
神曆又好ましきよれり
旅へゆる心か。免好と初曆
極へますれりよ。神曆

豊前周防薩長島修
可空曲堪智山園胱旌

開くとさうの花びらとう脣
親の眼うきてお母も。初曆
旅先や備てくるのうと初曆
かくめうてお母も。初曆
かくめうてお母も。初曆
孟きをうてお母も。初曆
美

書初

神持立まつてうらう筆始
立筆や呵られて字を書らる
えうぬ子の殊様さよ革はめ
書砂や。口替である。机う十
画を書て持てどやそれつ筆始

伊努青一梧簡芳文琴聽衆山
来曉溪栖翁郎律禮芳扇

書初や 祀め力とする。拳
福寿も子のうちより筆始
少功を挙て能く。其家うれ
書せし和様。多柄りえせよ
ち初や能く。またあき障子越
書初や互ひて語る。孫の年
續とも。扇の箇や筆とくめ
未合せ。夢人ようの夢初
ち初やあくハ御もゆよか
書初や祀め子能力わうき
書初や墨風る。おはほ紙
例。おそれゆる筆始

磐城作

羽後

黙有 素公素
芳古時歲自素
律仙自琴靜白木鳳

年はの皺多夢ト。試毫
唐蘿す。上戸の害ギ。上毛玉
とせの音が添ひぬ人。初の内
搖う多アリ。筋ねぬとさみ白ひじ
眠る。此。席乞。唐蘿の辟
申の無事。儀嵩とてとさみ
唐蘿の音や。一日退ふ。妙心
とせの。船方大至。唐蘿の辟
命。傳ふ。與ふ。おせや。とさみの辟
羽後

東京

庸菴より之にてまく
とくに研ぎをす
とくに研ぎをす
庸菴の香お婦
孫兒を腺也
破たれず徳力爲まへとくの害
とくの香お婦もやむ承る煙草也
何の事とぞれとぞれ
とくの研
東京傳素柳
下戸もと諱也ハモセムとくの研
黛也
文禮雅
芳律
水松精
白
猿
猿
若錦和歌
白のせひ初め上猿
若錦和歌
白のせひ初め上猿
若錦和歌
白のせひ初め上猿

著めらやちまくはれりやうなね
著ふやが一鶴てお能のき
さうむらや神、打新よ能のよせ
若舎や若人場ひの能やうせ
若舎や老の薔子會と練加減
著舎や搞人の能を雪よき
著舎や着くうやまやまの庵

松の内

まよ相つては立すや 松の内 須佐
年子の神代老くすり松の内
向い合ひ、寄かあひてまの内
松づくら蓋ふくらむ

東京

砾曲花苑告可
芳敬柳席下峰
月耽被枝山西

海鳴りを含む 来るや 松の内 相前物
葉の生まず害人ハシメ 桂木の
絆うゆの煙くわゆ まくの肉 倭澤碧
見ゆたに似ぬ客のまく ねむくち 上毛樵
子供え起りなれど季節の内 、 都三
都三のまくをもよおやまくの内 、
春のまくをもよおやまくの内 、
西風のまくをもよおやまくの内 、
は里方都三く年くほくの内 、
早翠をもよおやまくの内 、
あくまくのまくをもよおやまくの内

歲三月川戻童美井都三

羽林深金而トモトモ人松ノ肉
瑞ノお日モナムニ色ノお考リ肉
おトモニシ言葉をひやねづうち
於ノ日モナムニ身ノ内
頗是ナタノモ妙起也 李門内
第川ノ下す事ノ内
ソウナ打也弓矢也 矢中松竹肉
琴ナ音ナ 萬葉の内
特ナリ骨ナ われナ 横江
傳ナリ益ナ われナ 川ナ肉
ゆきナリナリ日モナクねば角
若ニテ得ナリ もの葉の内

東京山涼文書湛吳君好携
村雲翁年言緯禮蓄園冰山
芳文書湛吳君好携
村雲翁年言緯禮蓄園冰山

春神祇

神頃や人とそよのまよまよ
兮て帝の雪もや喜の併勢詣 侍豫 尾張
のくもやあわのねまよ神まよ 横院
神頃や拂うさりも唯なむれ 明後弄
若締节神代のまよ 山お處
代の神も小處もや 野の社
野祠お祭りも善の人にせうれ
荒絳をねりあく力りまき日バ
柏多叶つれす白の和神の拂
多所す方元房なれお幕お行
ほす良子お伊勢なうや拂お衣

上上
來檜士松以身
芳來檜士松以身
辯晚栖行嘗春穿山尾角附

初年

初年や世間の様子
初年や今や地主の囁き
初年や娘や子供の誕生日
初年や夫婦や嫁入りの家
初年や暮れの小家の害がある
初年や心と神の事
初年や隣の防守の方
初年や旅店の主の人の通う
初年や老柄のや老仲間
初年やあの時か書く誠懇

岸陸連友香春赤松月川峰山
羽前物

初年や小里の仲間の人々
はつもとや急り市街の早仕年
去年に押された腰の痛みが
初年や終るの頃から人の中
餘寒

夕風や今年のほよき星の下
近づけた後まわづは一就吉院
端住處の高木屋の築立と
掃除して洗濯のゆるみをうなぐ
身からなるてあらわす築立と
かけお宿の宿の築立とおもむ

山外の外物事春古雪春外朗
東京逸物事春古雪春外朗
友禪東林伯源志嵩丈喬唯
山松晚邱志嵩丈喬唯
我松尾參芳湛月一四
鳥巢多
山静泉林香半
羽林樹
多の巣の年一海天寺里

鶴風呂のまゝ降りて初の事多
力ある音や余きの山が鐘
歎きよううちへとすく鐘臺うれ
かこゑの所もみみゆく鐘臺うれ
鳥 巢
巢ト通ふ名をやうやくね極柱
門柱をさう萬をさうられなまめ祝
名の巣やせあるひく葉漏れる
鳥が巣や高巣因さかちまく小
巣の名や人新させ便はをゆく
祝名や巢をあらわせばく
名の巣の年一海天寺里

巢の育つ事多し——やうの雛
巢の多き事すりん育つやねに連
多き巢を巻くテ巣をとる
多き巣や 既にそれハ立てあく
巣を立一日うち原根場の移れ
晴れ立つてかゝる巢多き事
多き巣を立つ日を待ち原根音信
とくさすやあらん漏らきぬ其にく
多き巣をひくりや人方旅立度
御や多き巣を——緒の肩
齊の巣やわざ書かれてお松
多き巣や子供等の日のまゝ

東京皆
武井柳才

白川近連告汾梧山所芳人
一默翁火極處處山

首や て往來多き事の巣をば
多き巣や宿どくれうらじゆる松
小鳥にて巣を立すより落葉
歸鴈

音を立て降る影やうる上毛
ゆふ厂林木多き事の名所うや羽前
走く山やせんあら葉子ゆる厚
振れ立れと聲の声やうる厂
官文もととある事うや歸鴈
が厚やととある事うや歸鴈
江の水えりは獨りてゆく
入船やととれの厚くり葉

上毛
羽前
三都

文芳
禮律
山

唯蘭
山山風雨月

里松
山風月

芳連 橋供 吳元翁
和院 元翁
芳簡 候元翁
和院 元翁
泉翁 元翁
相模 美翁
横濱 菊翁
山史 史翁

春風

下弦和

新

春風や 東湖道り人通
喜々鳴る 雪鶯や ましの 鶯の音
音程升る 雪鶯が 鳴る 雪の音
喜々歌ふ 雪鶯が 鳴る 雪の音
春風や 萩傍ハ 駆使の 雪の音
はいの小山で 駆使の 雪の音
喜々歌ふ 雪鶯が 鳴る 雪の音
春風や 駆使の 雪の音
喜々歌ふ 小舟ハ 駆使の 雪の音
春風や 駆使の 雪の音
春風や 駆使の 雪の音

芳連 橋供 吴元翁
和院 元翁
芳簡 候元翁
和院 元翁
泉翁 元翁
相模 美翁
横濱 菊翁
山史 史翁

春風

下弦和

新

也てこれハ誰ノ事也テ、もとの風
季風の如きより、やむ能事庫
吹れつ。田舎ハ眼を失ひ、その風
青筋や程ナハむせる。辛子白
吹引とふきと御、うらへ青の風
あす牛に多き機縫や、もとの風
青筋や、まく吹き力あらず、また
併せ人立つんえ遙くや、まく吹
氣をもつて、もとの機縫や、もとの風
梅いそり、田の傳や、春りうる
株上り、帶ひらはるや、もとの風

東京

皆大鳥、索蘭、齊祥、堪研、轟晚、梧
川、笑官、川雨、峰松、園月、系栢

粧ひ、もの縫くや、まの風
皆、此のあや、やむ能事庫
春筋ナ、皆向ひ、都、
春水
深殿の盐、舞まん、まく吹
風とぞ、それハ、時より、先もや、まか
浦れゆす、程も、まく吹、春水
まの水、ばひ、方へ、浦れゆす
笠とああ、青や、まく吹
か窓や、陸れハ、角力とも、水
まのあは、葉うの流う事
解け合へ、さと冰や、まく吹

上毛

其文芳、文都、嵩都、歸、櫻、
仙、車、湖、美、城、川、巖、三、村、琴、門、
得、禮、燭

音をかく時をあわれりまつ水
ひきゆけり拂ひゆくもせぢ
まされや水を濁れすすと川
巻の音小巻の音の音者水
静め音ねりにあら旅美多
御みゆく漏れてやまにまの水
林木木立立立立立立立立
うるわの皆立立立立立立立
心地よき漏れやうこはまの多
處くよし舟船運ましもまが水
因まかまくまく野面やまの多
月朝の扇れとうやうやうやう

告晚芭逐昔堪昔芭逐公清一
西山月園言泉風木梧禽

俗橋ハ添れ立立立立立立立
美の水煙る山立立立立立立
津立漏立立立立立立立立
雪解

旅人立歸れ旅立立立立立立
煙立立立立立立立立立立立
立解立景立立立立立立立立
子供立立立立立立立立立立
煙立立立立立立立立立立立
桜川立立立立立立立立立立
立解立立立立立立立立立立
素白

芳桂本自本喧著樹素
几連白鶴風木梧禽言
堂

雪解や便りもぢらぬ背戸の山
二郎自ハ済の音よりへて言解
野の色ハ増す高峰より言解
言解の音より入門へ泊りうな
四方山が墨より通る言解
言解や多輪より作 疎忽
雪解の濁りもゆく一芳壁川
言解や白鳥引と雪す川の水
葦場ト一鶴のあれる言解
言解や相仰せあり此時も爲
ゆき解书月の陽をす池の面 東京城
寺一書小言解降りて落葉、
致

嵩都邊水美漢雅文家樂游
一吳簡晚漢至太角官署
致

落つる聲や言解の渴川、
あひかの降りあれど言解
雪解や山の端上る。自の照
押尾音が清そく言解
山道も言解、匿れて傳ひ
冰脚も雪解が知り掉落
筋すからぬや原根の言解
下萌

下 萌

下萌もすくの傍りあれ豆
傘小奇なき雨や草木之
下萌も吹きそぞる葦の中
下さる出立音をひく西上

松才山其素文芳柳東
空琴下山禮辨水在喬芳

下萌の魁うや草所
万葉名命をう端傳多高むか
下前やあすま桔垂の河せんら
下萌やまみとせんれ水の音
下前えや解く信われぬ葉垣根
下前名湯山海の聲き半
下前下前りれまくらる萩毛
下前やあくせんれ行備りき
下前やあくせんれ行備りき
下前やあくせんれ行備りき
下前やあくせんれ行備りき
下前やあくせんれ行備りき
下前やあくせんれ行備りき

井月堂友山泉晚晴可貴樂
文丈理默晚東津可貴樂
禮芳客史梁晚晴可貴樂

下も木本雀のあそぶありに

獨活

山色り立す、とこく獨活白上
獨活は黄や深山の色も賜はず
樹の柄も立ちて白の獨活葉が
鳥の脚も立ひうたなきうとあひ
独活の葉の育つ島の白ひうれ
あそれやかくすのうの獨活の紅
葉の葉ある葉うたに獨活の白ひう
劍さくさくや白ひの葉の脂の上
入院式のひれハ伸お獨活葉

乳の向く野方味子草の縁
船人水多川山すや蓮水もち
巣上すみとすの山上竹の籠
草席也東の田舎のむらう江
利田の船せれもすとまのむち
草すくもひきの舟すと草すく縁
竹縁节掩すとますとまの縁
草すくもひきの舟すと草すく縁
竹縁节掩すとますとまの縁
草すくもひきの舟すと草すく縁
竹縁节掩すとますとまの縁
草すくもひきの舟すと草すく縁

本丁聽龍三清祥香桔泉李鳳飴
立秀遙香桔祥三清龍聽本丁

我冰峰史松波梧泉李鳳飴

墨縁の毛筆を書く 拝帛糸
竹あらわし盤小孔に 曲りみぞう
時方山毛落の色す 墓紙あらわ
墓紙の不全とす 署う中
色と青の味の外すと 竹の縁
度森牛角 僧百牛ととく草の縁
橋くちに香り度すととく竹の縁
墨紙毛落ととく丸多ととく草の縁
色ととく 紅虫入ととく竹の縁

雛

とせうと雛あ旅籠の馳走れ
山里や林宮あらわ雛まく

絶句
琴士真
芳皆箇跡竹嶽琴行川
弄喧 芳行月漢琴芳行川
山風 緯川漢月漢琴芳行川

雛方アヒラノカタで巻マツリりて子コノ行ムス義ヨシれ
之シテ相シマや雛アヒラと心ハコトモもシマやうに
灯ランともせ篠スズクナ皆ミツ集シマや雛アヒラの巣
子コノ心ハコトモトシマる事ナリひり案
位シテ子コノ勝シマれおシマりて雛アヒラの前
雛アヒラの箱ケル添シマ狀シマツウもそシマ開ハシメルり
子コノ妙アヤシきシマりて飾シマるや雛アヒラの棚
綿ウニ絹シルク爲シマ答シマ應シマ姪アヒラひなシマ名
言シマ葉ハシマ多シマ傳シマあらたに生シマるや雛アヒラの前
曇シマ着シマて多シマ傳シマ雛アヒラの料シマ理シマリうな
金カネ屋ヤマ小シマ室シマヌマ雛アヒラを
年シマ姪アヒラや生シマや雛アヒラ相シマり物

羽アヒラ後シマ翌シマ文アヒラ身シマ齊シマ公シマ秀シマ川シマ通シマ山シマ

井シマ月シマ堂シマ琴シマ山シマ几シマ儿シマ嶽シマ公シマ秀シマ川シマ通シマ山シマ

稚アヒラノコの名アヒラノメイにアヒラノメイルシマもシマの策
之シテ也シマ雛アヒラとシマ新シマ人シマヒト飾シマるや冊シマりふるひいなシマ武シマヒト
年シマ進シマ也シマ雛アヒラ細シマすシマ、
雛アヒラ飾シマり開ハシメルて鑿シマを結シマ之シテ相シマ店シマ后シマ
雛アヒラ棚シマ也シマとシマ火シマ多シマ火シマ丸シマ極シマひ
也シマ市シマ也シマ雛アヒラやシマ字シマなる字シマある
吉シマのシマもシマあシマて目シマはシマ離シマうシマ争シマ
すシマうシマや雛アヒラ小シマ立シマ立シマよシマ立シマ
ふシマトシマ打シマきシマまシマて名シマもシマ離シマうシマ争シマ

山シマ富シマよシマよシマよシマ持シマ了シマ也シマ案

豊前

流りゆるまくらつむお離り夜夢うな
秋歌の多夢も暎よゆか離
子福者や暎うよさよ飾り離
せ嫁ひのんと遙う離り市
眼うるに費われ危市や離
離市やうりの私端の早灯
人母の昔頃の頃と離まうま
禮うけ計るに害め離り前
離持すあはれすり島通

種 疾

物一賜の物とお離り達妻の
旅をきのきの力あらん妻の達

素む日やゆうてをと達り女
賜牛馬耳ふ妻や高橋達
韓童一眠常はくらや達り妻
達り妻む日や海をとと海の面
車のまくわぬくわすとく車の達
拂う力足らぬやううううう達
妻ひりや上野の達りすとくす
京をとてゆハ妻むや京り達
田の水が泡くとくとく達りすと
笠経信間の妻の名や達り妻
彦端留眠乳差さんうすと達
達り妻む小背原とましと達

高橋 里
山 連 達 晚 兒 蟹 田 水 自 桂 栋 堂 翁 罗 領

金河や　て撞く事あらし　裏山　東京

丹

裏山やう波りゆかへ　淺りやう

東京

うすい鐘松ハ英々く音子う
來音や高音を出でてうるの声

戸

つひせと傳播する　裏山　裏山

山

都もうすい波音　音波音子　山山

山

佑保姫

佑保姫や通る山歌也　緒子　君
志原姫やソウモニテ歌る山から
佑保姫子　佐野　おさな　鈴馬　おれ
佑保姫や重音で　之たき山の形
佑保姫の　深名　源氏　御　舟

明前

桂　峰　本　峰　芳　其　皆　全　可

舟

芳　公　川　芳　菩　薩　芳　其　皆　全　可

佑保姫の　被や　ひそん　鶴の魚
佑保姫や　松音　撞松の　緒子　山
佑保姫子　海　音　音　山　降　松
音　音　の　懐　音　音　小　音　音
佑保姫　鐵　音　音　喜　音　緒　、
佑保姫子　鉢　音　音　聲　音　音
音　音　の　音　袖　被　音　音　三　保　音
佑保姫子　音　音　扇　音　透　間　音

東京

署　里　里　う　や　音　音　音
上　野　う　う　端　う　め　う　音　音
花　う　う　隨　う　う　音　音　音

名所花

以　月　峰　芳　古　皆　澣　俱　桂
春　醉　風　緋　松　川　月　蓑　巔　園　月

菜を好む連あれど、鴨田を
行ふるを御恩はくや、嵯峨の道
小金井や、鴨川濁毛衣が、
通ひて、清方並く、吉川
駒と程よし聖のそり墨うれ
移すも、あらわる。并び嵐山
並みせり下り符や、大堰川
寫生ト、墨や、並り吉壁山
御小御す花や、夕日の入佐山
満月、共に堤とあり、
貴人の為の、用や、君の、
ちと、活て健手

都多

桃 花

立木の、家、
桃の花

桃の花

人形も、

日暮も、桃の花

不以着、生の、
桃の花時、緋、
立木の、生の、
人形も、

立木の、生の、
桃の花時、緋、
立木の、生の、
人形も、

桂梧連春近事一和可歲芳律川芳年翁親舊山我自

素柳萬文貫祥善來芝梧連春近事一和可歲芳律川芳年翁親舊山我自

白下山啓山松雪曉山桺葉

肥後

羽後

むくに傳よ生くあらじや 桃の花

木草むき田舎うらうすすむ

まきかくわくわくのひすり 桃の花

村の花が葉肉うりや 桃の花

ほくらの家を喰かく くわくわく

るの青竹牛の危機や 桃の花

桃の花や白い泥の花すき 白い花

牛の脛をうちて死みや 桃の花

酒のあらす生魚ひき 桃の花

苦桃と思ひれぬうす うすの花

海棠

海棠のあさくさひや 窓ガ窓

東京

湛玉寺 菩提樹 声山川

帝峰

禮律太

芳声

文芳

岱

其

芳

海棠とやそくわらや 鹿旅翁
海棠や丸床柱や 別 度浦

海棠とく桺の眼鏡や あく窓

海棠や あく降らゆく 乾草

海棠とひそむくらうや あく

海棠や うぐいすの雨や 小半日

海棠とひそむくらうや 雨の濡らう

海棠や あく重ねて かく風情

海棠とひそむくらうや 雨の濡らう

梅木

芳其冰檜默瓢箇湛簾真
緯獨柯樞丈種溪園泉弟川

豊前

城り 播うよ 滝の 棚の 始方
 始方の下を走る川を 播本あれ
 六ツから八ツで 仕事もつむねあ
 と小川が走るといふは 播本あれ
 客船の上を走る 播本と管りから
 稲蓬の上を走る 播本と 莫金
 播本の席に沿ひや 鷺の垣 上毛
 河内 さすや 播本の金の 桜
 を造形するもの 播本と 湯川
 播本の川の邊は 滝あれ され
 てすすむ合馬のゆづる 播本が
 播本あるうち側 今 播本好

赤 大 琴 空 吴 茅 晚 翠 晚
 番 桂 連 聽 華 都 泉 芳 懇 古
 曾保 郡 菩 海 柳 月 柳

播本一た筋の筋走り 一月の暁
 降山のあきはめ 播本あれ
 播本の子のあらまをめ 播本あれ
 おとせれの詔ちよけいよつて東
 京 番舟のあらまをめ 播本あれ
 小刀を先譽め うつ 播本あれ
 苗代の不景め えぬ 播本あれ

苗代

苗代の指れる旅の日暮れ
 苗代の水の跡をめ 播本あれ
 苗代の水の跡をめ うつ
 苗代の水の跡をめ 山の歌
 苗代の水の跡をめ うつ
 苗代の水の跡をめ うつ

一 喜 多 都 文 理 禮 福
 都 美 雅 篇

苗代モ 家ガ 道ノヤ 大持人
前代トニ 美乃林 や多御子
糠雨モ おゆハ あらえの 苗代田
苗代ハ 田小屋色シ トコロ

蛙

其中ニ 深ナカ ある家 写 境
又雨ナカ 有ル事立チ 有ル桂
田ノ水ナカ 潤ナシ ハ 境
泥池也 有ルテ 有ル水 有ル泥
左毛モ うな池等 蜂ノ葉ノ原味
守山ノ下生根ノ植也 有ル桂
行性也 有ル事替テ 有ル 池ノ名

羽後

喜蘭園 喜蘭園
芳齋月雨 金山瓶白月
山

粒無ナ 朝霞モ 有ル 河
田素モ 也 稲量モ 有ル 河 境
糠之葉モ 清ノ合山素モ 有ル 河
時ノ一丁度モ 朝霞モ 有ル 河
水泡モ 有ル 河 河 有ル 河
弓代モ 有ル 河 有ル 蛙モ 有ル
人ノ高音モ 有ル 蛙モ 有ル 蛙
声モ 有ル 井口モ 有ル 有ル 蛙
河邊付水端モ 有ル 有ル 有ル
自ノ音モ 有ル 有ル 有ル 有ル 蛙
河底付水端モ 有ル 有ル 有ル
兩却ノ聲然 有ル 蛙モ 有ル 蛙

横段

柯景可一樵閣松曉梅白蕉
蘭秀也山知童树步月元水翁

降ふる音すよし

四輪

立斗耳のかみさ音すよし

桂

月の聲すよし

田の蛙

通う雨あくま蛙の月聲すよし

通

茅の戸や陸路邊ひ瓶の中

中

居無何からく風すよし

本

水音の音葉と竹葉と

陸

老の脚と足と拂ふ新葉和陸

因

子傳けはとくに音寫拂ふ

拂

往色の物と生れ葉と

蝶と

月と紅照らされて常

陸

雀子

雀子有立ちも蝶一き白鶴く風
而立すよし知れづまくすよし雀の子
雀子に細猫竹の戸にうす
生え色すよし歌すよし歌すよし素
五色れ小雀たどらう雀雀の子
写すよし初鳥つみせう雀すよし子
雀子や雀の歌すよし歌すよし子
時すきの声すよし歌すよし子
兔鈴すよつまく歌すよし子
立候鳥をうすよし歌せん雀の子
子立地て雀子呼や歌せん

信濃

素公麟如時琴儿器
白木泉寺元嘯風月堂琴

葉一某默告謫芳文竹格空堪
律禮浮柵 因翁水史譽聲

崔子子先シロコアタマキテキニ 純綱シロコ
志シモコトニ免子シモコトアサヒシテ 色シロノカタタケ
甲シロコトニシムホス育シロコトチヨ 崔シロコト子
御怖シロコト也幼シロコトニシモウタキシロコト子
崔シロコト子也青シロコト清シロコト吉シロコト子也林鷦シロコト鷯シロコト
國シロコトニシモウトシロコトシモウトシロコト也崔シロコト子
志シモコトメ子シモコトニシモウトシロコト之步シロコト伊
峰シロコトハ多シロコトニ朱シロコトニシモウトシロコト也崔シロコト子
崔シロコト子也羅シロコト事シロコト仰シロコトセ好シロコトセヤシロコト
志シモコトメ子シモコトニシモウトシロコト也崔シロコト子
崔シロコト子也鬼シロコト子シロコト也崔シロコト子

月泉峰嶺涼席一查シロコト丹葉文史翁藝柳蓋蓄

其獨律山川雪月空通音悟身真清以文淇

角角角角角角角角角角角角角角角角

鹿角角角角角角角角角角角角角角角

鹿角角

友齊春移松移松身真清以文淇

角角角角角角角角角角角角角角角角

燒あよふあく奈川——岸角
えう向あせにれ唐や脚く角
足ゆくはうとす脚もす唐角
角度く姫子よ唐え越ひう
彦ある角小彳ひ也萬え也
化つま——赤の揚う萬の脚角
えをそ歩てかけぬ女也萬角
船くちもとれと御見くと彦角

躡 踏

身まきねまつ——極くの唐う手
躡 踏くら赤り脚くる湯山の
並ゆくする脚——躡 踏くら

山度き候清す姐のつ——
喉もちて夙通きぬ躡 踏うる
喰い井戸の度き傳赤手ほり
ア活くちや雲葉原の次徳利
花素ふ根おもとたむ躡 踏哉
意あらる若同の家や赤手
名を立てる事す山うつ——
ゆくも入日モ赤きば——
温承をゆき湧き山の根や赤
岩やうねんづれに杼者
不ハ筋す明く冬季赤手
済ゆ——赤と左ト——赤躡 踏

桃士一君清來芳其悟多左筒飄晚
可承友雙一君清來玉蘭喧芳獨情哉
山嘴山松如泉馨行樹繩

架種溪漢我律獨情哉
山雨句北其悟多左筒飄晚

水無事處く源れども岩づり
萬丈す水車傍り下流
船もくとて舟をたれタリや赤躑躅
紅葉もみゆく夕暮れ萬づり

茶摘

身入る見立の時々茶摘
茶摘うて摘ぬ人手傳い
通ひて身入る人手傳い茶摘
身入る身入る人手傳い茶摘
身入る身入る人手傳い茶摘
身入る身入る人手傳い茶摘
身入る身入る人手傳い茶摘
身入る身入る人手傳い茶摘

祥符丹峰金喙一本鳳凰
芳樹松蘿翁泉波靜風月
芝蘭玉曲飄馨告桂香
上毛

大連の日ちに序の葉うつは
喰ま候む字活の志心もる茶摘
福多候あき乍らめ葉うつは
身入る身入る身入る身入る身入る
里の家うつは根入葉うつは
摘ひて身入る葉の本おじいは
連うつは身入る身入る葉うつは
二番昔八年身入る身入る葉
喰ま候む字候笑ひて身入る葉
摘ひて身入る葉の本おじいは
喰ま候む身入る身入る葉

芝蘭玉曲飄馨告桂香
芳樹松蘿翁泉波靜風月
一本鳳凰金喙祥符丹峰
上毛

葉としもまなぶゆを透す柔膜

芳律

雜春

ゆくゆて仰うたはまひ
大色の道者力美と善光寺
賜ふ金と美や四小人山の入
初よりくまもと山や度遠不
説くらむゆりおみく美の萬
極とくあとや極と向岩
美と風あと風とおきくれ
美と強想ひり外りり妙の事
以てかじる美と抱くよき冬於也
本母まや海と里人りけん

明月

曉東夜月嶺
晚默川泉靜
翠史曉水紅葉

喜びゆかずあれ
喜びゆかずあれ
者せり一叶ひて喜びすあれ
喜びゆかずあれ
川端の松綱の喜び光りあれ
於こよき寫くよきは 喜び自
里喜び喜びにきくよき写生の福
引舟の福の喜び
喜びゆかずあれ
喜びゆかずあれ
喜びゆかずあれ

喜怒殘

文芳白喜近空喜
禮緯人柳山 千歲翁

法聖の御醫也。事の名號は
多ひもとある者也。名號は
以て之の御醫を考へる爲號。是
が事はせり。天龍也。
河内也。御半身者は名號也。
蘇仙也。考へる爲號。而の音
山里也。考へる爲號。柳子也
考へる爲號。少納と見る危
向之の極力考へる爲號。考
えねば何の事か。考へる爲號
古提縫也。考へる爲號。都考
え考へる爲號。考へる爲號。

唯桂月友桂月移風
其堪芝善研海繁丁山誠山官
む

不二ノれど、紡生の事の名號也。
名號を考へる爲號。京近ノ

鰐

唐の魚也。考へる爲號。柳魚
三井の魚也。考へる爲號。鰐
市中水市上魚也。考へる爲
あく舟方魚也。考へる爲號。鰐
名多の鰐也。考へる爲號。柳魚
早島の魚也。考へる爲號。柳魚
赤水市也。考へる爲號。鰐
手舟の鰐也。考へる爲號。初鰐
行之也。冲ノ鰐也。海日和

芳文
律禮

友桂聽蕊以橋柳嘉嘵
山月泉山春風下峰凡

和解の事も御手入らぬるに於
魚川舟人御用立て和解を
とく者と生年歳男也和解を
和解の事はかまや和解
漁村の畢竟立てども和解
約束が叶ふ事なし和解を
うつて和解の市や和解
市小花等之す和解の事
並行の上野一里やもも和解
町一里にて高木久和解
和解相手をうけたる價を

立其空等空所文都巖和碕
美琴観翁嘯
園言

すやう傳のナ門や和解
献立の急子背の事立て和解
墨の事墨乳うなぐ和解
老の事老の意地とく和解
不老の事不老の意地とく和解
不老の事不老の意地とく和解
早船や保の事傳和解

鮓

梅一以降芳晚春年
桜龍多春風
桜葉繁魚鹽
桜葉繁魚鹽

早鮓の子いと萬うと鮑を三事
えやす一や萬鮓の件。初体之
事鮓や鮑をもんじらん萬鮓事
早鮓一や萬鮓の件。別名客
子いとや寄をとる。鮑の
とや鮓の身の事の間の事。萬
早鮓や鮑をせざる。鮑を乞ひ
ますや山と川の間の届
早鮓や鮑をせざる。鮑を乞ひ
ます鮓の事。一曰鮓や紅生養
鮓の青玉茎の事。鮑を立つ。鮑
鮑を立つ。水部。彦根。東京

東京

浦香院海猶
黙来院勝梧吉
一美文宣年栖山翠史
支宣文

早鮓や而の傳する。おもひつけ
風筋やア鮓。一也。主な
アリヤ鶴之をあわせたる追ひ

鮓

鮓粉とて色に似て。傳の事。ア
鮓の事。多く金粉の粉と云ふ。ア
は。アヒトと云ふ者。鮓粉
本の事。アヒトと白粉。アヒト
アヒトと白粉。アヒトと白粉。
鮓粉とて。善易也。粉と落あら
卷く。アヒトと白粉。アヒトと白粉。
小人粉とて。粉と白粉。

古鼓著
玉梅天
白樵承
儿井多
松室緯
山史

奪持付て糧おはう車
糧も身をやかの所から出
たる今後一とば糧が
舟の舟宿はりてらるちまき
船毎に糧配めや船間脇
鉗で以て間隔ちまきれ
温氣上りや笠解き鳥へ笠穂
葉ひくわくわくは飾り鶴手筋
きみすまわせき一色や笠穂

笠穂

萬葉集 梅や月夜の事
爾の意を拂ふ賜ゆ

寒き行つて人の知る所持せ
体極よもゆきあらかれて
青梅や山のうきよのくわくの識
毛山のや砂り能く利一鉢料理
青梅や梅よもゆくわくの體がられ
毛梅や梅よもゆくわくの島うな
青梅や被持つて見ゆる
毛梅や梅轉く眼の風の林
青梅や山里の事と云ふうち
青梅や毛梅の事と云ふ

碁葉

本末古事記釋文
緯說松胎系弘松鳳山圖篇

内傳 文芳義悟芝篇喜貫浦
禮經醫樞山溪言山處
靜風

基葉や照れはるすと葉の茎より
至るや奇麗始く力人せさせ
まくさくや重ねられて蟲はき
ふ葉や茎むとあき尼の鹿
基葉は皆眼のあらや市の人
不氣うや心もゆめふ葉の煙
うの葉や灯火あくまに縁簾
基葉の皆向つれと物いき
高菊やそよば智る。手牛よ
りくまくと斗りやたの名を紹れに
ふ葉や極すうりゆき煙草盆
茎ハラヤ基葉りとも枝である

梧床默晚聴告鄰井月芳園客余史曉樞
山

基葉の葉もあらやねの
うの葉や是もあらやのとある
系菊や鹽まれさるは極と云
ふ葉の照れはせぬ匂ひ
うの葉や紅葉の色養ひ
基葉や是の日脚の葉の匂
ふ葉のうそせす小西翁
工事の度の説うり言ひ

苔の巻

文末清峰芳精本貞一以左
通風梧風律龍東風音

名を手て水音濤——苔や花
言の墨岩とおもひやる木の根が
さくらはゆ涌多也苔のむ
きの外臨ねとくや苔や苔や花
木の木の石の苔や苔や苔や花
碑をぐれハ梵字をかくと苔や花
古井ニテややも縫へに苔の花
もくもく庵む巖や苔や苔や花
湖裏く與れハ言——苔のむ
いかハ算もあくべ苔や花
ねをわる日もとくや苔や花
戸極傳くる水の味——苔や花

桂連一都可美誠琴
芭蕉貞山柳山
梧筒可真芭山
肱腕浜芳松柳山
目

碑の文字おほきくとくら苔や花
水手て自ら見ゆめお言ふとな
筒井一はしおつや苔や花盛り
素徒是侍水時く度や苔や花

藻玉

葉ももううけた象ぬりまき
葉もや人の眼もまくぬとく
時もくや葉も白く家の風
葉玉が香ふ立惜む度家や
えす葉や翠玉を傳る音を苔
葉もや昔を傳る其同士

朱済文芳
和種曉松月通峰
一瓢朱祥松文森

葉玉や地やうどる簾や

萬葉や藤輪んはくも。つや
えすや昔ゆうき、住ひや

葉や京の山、おもひや

圓扇

かり湯の業内うちくく圓扇
浴をうちゆうち湯うちいば
風を吹ふまつたまう圓扇
山の名を立ちあらむうちひう
羽舟で大きくまう圓扇の
林笠の外か訓降す旅うちハ
傳のなきせんや、圓扇賣

波可香芳海辯巖
桂蘭雨川風月
松曉山言雨山言

這うて牛くちとく御すあ扇や
来る程、皆圓扇うり紙や客
鈎扇せ——柳り先や圓扇の事
半船小圓扇持きの船くは
ある人を扇きせし妻の毫扇や
道中、拂く拂くうちと車
風をうなぐや圓扇を持きうち
圓扇の方削扇まと泊りや
絳圓扇や花の扇めくらや
毎の人折り二階やうちのうれ
穢れ利や——高扇もまた御傳

友空齋晚梧山言
唐琴堂芳軒史翠栖年

人中に賜立あら警や 江戸扇
持ててかたててかたててかたてて
絛周扇やうそをすり 江戸扇
絛周扇やうそをすり 江戸扇
絛周扇やうそをすり 江戸扇
絛周扇やうそをすり 江戸扇
絛周扇やうそをすり 江戸扇
絛周扇やうそをすり 江戸扇
絛周扇やうそをすり 江戸扇

蚊

均の声やうそ地うる涙うそに
蚊がうそうそ撃て打てうそ涙
うそうそうそうそうそうそうそ
佛檀うそうそうそうそうそうそ

蚊子生れゆくやうそうそうそ
蚊がうそうそうそうそうそうそ
園うそうそうそうそうそうそ
多柳やうそうそうそうそうそ
郡うそうそうそうそうそうそ
月の空うそうそうそうそうそ
蚊うそうそうそうそうそうそ
放うそうそうそうそうそ
蚊うそうそうそうそうそ
蚊うそうそうそうそうそ
蚊うそうそうそうそうそ
血うそうそうそうそうそ

兒時送費雙樵香柳貞
年柳琴堂月山水松翁峰下來

解其舟冉皆芳川慕心芳松林
風雨全本塘瞻瞻瞻瞻瞻

松桂の立す 韶うね 水り上
蚊が立た中にソシテ 小牛立
人子舟て 写船は 流る小川流れ
やく出でましゆる 韶节 橋の上
寅立せ草 始事傳奏
舟の柳をわくる 船頭の船
舟の船の舟間や 舟のうちれ西
毒草立馬の草木屋の息きい
船の舟の舟も多る 舟
蚊が立ぬうらも多る 舟
ミーの舟をなくせられ
舟の舟の舟の舟の舟の舟

吉 寂山院 暁曉松香
川 曲芝告 東僧立泉
皆 皆立泉僧東曲芝告
皆立泉僧東曲芝告

近在吾常の蘇我をもむ
立の木と竹と石と水と山と
群れの竹や木の木と 植の洞
堂をやされてもう 写被され
ゆき煙煙の山と木の木と
蚊が立やせましゆる 蝉の聲
立の木と水と山と木の木と

蝙蝠

蝙蝠の木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と

可 古其甚文芳
全洪林儿善 禮緯獨む松芳
圖元堂哉

端幅の裏力で打つてはれの藍
端幅や駕け立橋の清の初
うそりや千尋力近る摩裏普清
端幅や自え江底の夕も一紀
端幅や馬の躊躇とる宵月期
端幅が近づて先手を投げ舞
端幅の生工助うすや升の身
端幅の相手はちよや形章
かくわくの序うれ事金松井町
端幅や月をうせたて徳重の子

羽衣

文清貞可告吳梧曲赤默
禮川東吉山老言栖脫院丈

かくわくの序うれ事金松井町
基出

打つてやさうり 携き易ひ
船打もひの度翁和 有り出
御前の眼底をまつ るきの心
かくわくの序うれ事
打つてやさうり 基出
あくねお手をまつて 有り出
船打もひの度翁和 入り出 基出
署重了 かくわくの序うれ事
金松井町

溝空儿共井玉裕信以唯
園 堂雪月山亨春風 終

人も灯を便り一矢もと某の写
書の紙に迷うて失ひぬ事無也
うる年々多うむく少く也
灯の轍をかせし爲めの事の出

死蟻

白羽のやうでさすがの死蟻
ゆきの黒い死蟻とて死蟻
もくろて死蟻 ゆきの死蟻
あらわに遙かにわざと死蟻
ゆきの死蟻とて死蟻
ゆきの死蟻とて死蟻
ゆきの死蟻とて死蟻
ゆきの死蟻とて死蟻
ゆきの死蟻とて死蟻

簡 翫 原 葦 律 漢
連士文九湖棋士自
行叢堂啓山禪

ちくわくとや死蟻の羽が走る
満身の死蟻をかくして死蟻が
自分の脚と生きて死蟻と死蟻
死蟻のれども死蟻と死蟻
死蟻とて死蟻の立りと
橋桁と自脚届み死蟻と
神垣と死蟻とみせ甘連
煙と死蟻とて死蟻と死蟻
吉机と死蟻と死蟻と死蟻

毒林

暮り待つうの仕合 春の林
毒林とて死蟻とて死蟻

白友 芳舟 茉生梧音 一翁 樹
山水 得落山 栖窓如鶴翁

羽前

火を垂く室や暮の秋
三木帰の隣船ハシ　暮女舞
いの家が火煙モタリ麥の秋
尚子あとて松竹古の暮の秋
暮れや里船　き日知風
い井水　くま子の席　暮の秋
松竹よ屋船　は　麥の舞
暮れや兔角薄　聖の宿
素船や屋角氣のあれ　家
麥船や島を興　者賣
暮れや舡　よせそぞく載のる
蟹り舟とよきも出　也暮れ

月桂柳山汲泉下月桂
晚空黙左庵去近三月桂柳
文　鶴柳山汲泉下月桂

彦はるか正内や　暮の秋
暮れや暮耀ト仰々　旅巡

暮秋放

閑隱ト梅雨の内ナム　暮の秋
暮れや暮雨ト　は　長命寺
目盛りも僅塵の煙　や成田山
涼　さや渴拭が音　然の事
鷺船それ歸　裡り浮き　杜若
胎智山ト　種々の事の暮の秋
橘　法の花　中門寺
葛　水や十念寺　乳突紀
峰　掠む　達　上野や郭公

文芳　吳　玉　吳　月　峯　芳　禮
禮律芳官柳桂草詩　得

田植

いそ早ん垣外ハ田を植る声
傍らぬ日の暮れぬけ田植
植る田の水や土をひ馬の用
植る田の身に水味と錢と
耕當負てといひて莫さう田植喫
習ふよりはれて年早き田植れ
風とある神子もありや田の急噴
射や植田をさす腰下に
紅葉ひと枝せてはらう田植
手まくのせ事てあまく田植
蓑笠りぬれて自せたまに田を育む

羽木

喧風本桂如桂柳柳玉多桂月泉乳堂
儿都美桂翁瓶我

子小生傳者笠着せし田植
田を植て耕すからども馬を引う音
植つ事やか事ある子方田の汚れ
田の色や色より遙ひの種播ひ
濡らうらあきほの田植うな
植す田小町参りゆく李
參りゆくも年早き田植
すとよしの田植一田を急喫
矢自と之種萬田植せず植盤
植上田を種てちや年休

水室

立自日初おほ月
水室守

遠春其曲艺晚可白文芳
水雲山朧人禮山

義琴

棘

翁の時ぬうちに冰室を廻る
名の山の深きも知らず冰室を尋
冰室守へり一き里の所處に在
景や故の苦勞ハ知り亦知ら
不思第凡ては冷ひ冰室はな
或の物をかみとくまといひうば
眉の霜かくらむかす山室守
冰室山古の峯一縷を李
翁の手に漫す元八月冰室守
元年夏別の心よりお家守

蟬

蟬の声和るまことにたまに松の脂

户極井の水邊を夕々蟬の声
蟬の声如琴の音高響く照
人畜を絶一矢届か蟬の声無
蟬の声や身をもじ乾く緋の虫血
せんの音打ひるる蟬の声
蟬の声如琴の音此時通す雨
升る音高響く十日蟬の声
生えども之を生す音蟬の声
せんの音や水を万代聴き聲
初蝉や本の懷ト共多雨
蟬の声石火煙けしおれ山
山の聲ややれと聲かや蟬の声

呉伯
正

梧室曲空默東階洪遜文近琴
栖山耽文曉鶴山我啓山芳

儿芳有以可薰柳山柳林堂
友山律儀春鶴吼柳山柳林堂

集

燕人ノ名ハシトモアリセテテ
シテヨリハ小眼ノナリ、脛ニ博サ声

博博シヤ高也、橋ニシテ、物ノ程
刻ムシテ、其走牛ノ橋シヤセテ、文
博上參ス。而テ之ヲ伸シテ、柳

水鶴

田一枚水鶴ノ内也。植メ肉
葉れシ物。水鶴ノ遺ヤ蘭ノ錢也
也。之ニテ、其れハ鶴也。水鶴ノ事
因テ、鶴也。水鶴ノ道也。戸口也。鶴
也。之ニテ、鶴也。水鶴也。水鶴也
也。鶴也。因テ、鶴也。之ニテ、鶴也。

吳文芳、龜丹、自遙、友以、清靜、禮律、宮
禁山、春多、悟靜、行憲、元琴、曉憲、園、曉憲、蘭、
緯、蕙、蘭、緯、芳、涼、一、芝、空、湛赤、晩音、柄、歲、士

連、水鶴、早、壁、苔、陷、鶴、陽、也、苔、田、中、水、鶴、
鶴、芽、生、也、水、鶴、子、水、鶴、雨、
却、水、鶴、打、新、ハ、水、鶴、
少、水、鶴、也、水、鶴、也、水、鶴、
用、水、鶴、也、水、鶴、也、水、鶴、
水、鶴、也、水、鶴、也、水、鶴、
葉、水、鶴、也、水、鶴、也、水、鶴、
族、水、鶴、也、水、鶴、也、水、鶴、
舟、水、鶴、也、水、鶴、也、水、鶴、

鶴

丁子あひ鶴磯中内小竹寺証
し業力也松葉紫也生好鶴而以
鶴篠や闇力吟くとする罷
せざれハ前守の事也鶴又以再
其罷ハ深 鶴の唐只酒之才
禁りて萬子勵む翁鶴が
子小湯。因細力持了鶴西院
火の敷が三子。林さ鶴川が
多放すたる。老あるて翁鶴え
寫の風を譲りぬけたる鶴川が
多て至手肌の涼しき鶴川が

暖蘭柳桂雙几共告點一芳
律和史家宣堂松月下雨風

虫 丁

庚子や人もまきせみひと戸前
山一牛や深り縦もとくらひ蛭
虫テヤ先一日書画と、裡
山一牛や墨の印をもへ軸斗り
ちテや和り、昔も初ひひす
虫テや古い歎を、矣
山一牛や人もまたひよひき
ちテや武具の光りもあ。曲絃
虫テや草木のさう。笛管
虫テや柿部のハ別度浦
山一牛や博多の水す。佐藤深

時方
如

香邊聞多蕉其曲暖
風聲我巖翁鶴耽繫鶴

多情作義されりく お用子
古事小無くて是れ

暑者

暑はあらうるはあら熱い
たまふらむよを傳へ——暑はれ
追はれまの牛もさう。暑うな
あひがちやの波傳者ひゆう味
かまら家根縁に町の暑う車
水車で度却す音めりあつま
門はまおとすむ初うめ暑う車
新戸山や梵立館下野すあら
傳家の標を傳め暑う車

岩代

芳聴喧輪玉桂櫻
空友月明山泉音泉
山畫

降の香せ松手傳牛車。暑う車
牛馬の縁く降くのあらまされ
却類多喜多香多也。暑う車
まの音ふらす車う車う車
破れ利くやト一時ある暑う車
暑者もや馬よられ一高官領
蒸暑——海くうらわの宣揮振
えくよまく暑——振舞之車牛
移暑——テく萬煙の白の門
暑う車の舟て馬すれ日移す車
時まくアラモトモヒキ暑う車
能石のこゆ。其弊弊りあらま

遙晩晴空碧告白一九所逸
翠園 重栖東魚水淵堂處水

川筋や累々ある。——
闇ハ暑暑を先づておちる
人あらぬ黒や年をとる阿波

旅伴夕立

夕立は暮れて歸り 柳 笠
ゆふるよおゆく元傳作 三教堂
名主をも帰りて宿ひきゆうれ
夕立やあさ早うれと鳥鳴り
夕立は暮れて旅の方れうな
ゆふるよおゆく翌日迎す旅のうら
夕立や鳥うね入り 柳 笠
夕立の用意又えぞう旅切者

可文芳 香井雙晴柳席 下峰
龜香松井雙晴柳席 下峰 律禮芳

夕立やあさ早うれと 屢旅見
夕立は遙かに旅ううれ道
中立やわゆる同士の早うす
夕立ちうれ 旅舟お輕舟澤
夕立はゆきうれと早うれ 河うれ
そ一鳥を尋ねとくとくもく
夕立や遙田を廻るうる膳道
中立のとてとと興すと船うれ
夕立は一里河うれ 一都 入
降れやゆきいん代吉田のうれ
雜 茄

芳文 喻 朝宗 来吉 简春
禮律 蕉 葵 年園 喻 溪 京
風

暮物の傍りうるる 吳服店

まひよい御まき下宿浦

ほりての重下 墓に傍り足

筋も喜び人を往来橋之上

手の筋や筋をむけり 無心

舟止行も暮日落也 蘭田川

香久山や御製の傳は墓事記

うちめも筋筋持てて暮の旅

綿と仰ぐものゆうすく暮の室

新晴や引際も暮の不二

此ノ所にて勤うねりと暮れや

ナホリ 徒行の事多し

暮方あく知らぬかうるい都多

門福

夙主は人間が行福の住處深
くやまの事あとも遙や行福の所
我心はて床のよせむの事
行やまも今月を行福の行福され
寅よき卯と行福のことを絶え
金河を走り卯と行福の卯と行福
其のう子供夜見立や夕もひ
孫連とよせましや 行福川

芳津

其肩告格清貫松文筆
獨演鳴泉山通角

悟齋公堂紫雲堂 韶峰堂
文其古箇元器几空室 楽志松溪館琴堂

月をよかよ宿すは福うな

芳緯

祐う稀くやうに芳をうく桺哉

湖後唯芳

野き垣籬下うらかう窓窓
海苔賣の高野く二人連立て
立ちき御く稀と詩宜の駒^き
峰れ是稀て降る月 月めに

やうと墨さの匂うほうほ

ウ
西暦の櫻嬢が草へき庭に絵
言今戸に在れ繁や家りし
は古のテ原日を初もうちら表
うれ文へて歌をみへかる
ねくにほの扇の紅糸帶よつま
奥の院生得長い石 檜
山陰の陸おまへ月のせりづる深
きやうへからひ露が降るよ
鹿笛を吹く音すゑれなる
刀槍なら塵を垂れ中
旅先の舟ぬくべにて廻り
弦生一といふの日をす

風緯風緯風緯風緯風緯

文は利落の友をすてぬそらん
 振りもあれば 姉の箱數
 和子の腰もたまへずの女性
 ひらき障子と便利な是
 年にとき馬とアリゆる牧場
 運のほすまハ金も手を奪ひ
 ほ内儀が智恵を發揮する事なし
 命婦トリの縁よりま此
 稲の自作の簾うけうて
 袖ぬれ事の如きはも等く
 紫らす地考り前り小シト
 灯に美き菓子の如く

律風律風得風律風律風

雇人のきひうさへなれこむよ
 温居所へゆく事稀す之
 上京ハ姫峰アマミツ山面也や
 かつりやうそもにとうね基翁
 きうけて満たら若おひの
 ゆみよからむは済すよき水

裕着るや東小又帰る松の葉
 嘴残りたる庭の山吹 東京青芳

律宜律

ソノモ機榜なまかはる事之
月為ミ殊ナリトキ機榜マ
機榜ナリム。蓑ウシテ
ウシテ舟ヘモトク。ちも柳
池れナシアリ。船の縁構
不自由ハ訓アサセム。惟恒居
假名の會ハ絶命セヨ
開市ウニ奇ナシ。洞ナシセヨ
洞ナシテ。袖ナシシム。
大奇ナ底ニ御ル。舟ナシシム
銅ノ算裡も莫レ。ミ相
百之上距一也。仕事ナシ。第ナ相

腸見方せしナリ。麻糸を捲く
是程ナシに糸をにまゆ
珍シキモジナシ。山ガモ
二方 飽物を善ニ清潔。古多市
昔ナシモリテ清うむ
下祇原を勤テ居ナシ。引み
次男ナシ。渴ナシ。渴ナシ。金
泉行官用ひられぬ。城内われて
箕素。三。よま。婚禮
房楊枝。二。撒。耳鹽

宜律宜律宜律宜律宜律

八百屋の丁稚口おさか
吹津のぼうだいさんほ昇る月
かがすきもれたりキモくわら絆
縁えんゆゑ手筋てすじうまのいきいき細
十日じつ芸げあみのなづきづきもも歸き
母おや新しんトト一いつ回かいの育そりそひひ先
子こ書かてて羽は織おりををあけけ借かららて
章あににたたととるるかかままなな
傳つたたすすせせざざくくか

得宜得宜得宜得宜得宜

大館氏所齋送

内佐用年主考

古文子

